空に立つ波

古今和歌集

竹西寛子／長谷川青澄・絵

19

平凡社名作文庫

立つ波

古今和歌集

竹西寛子／長谷川青澄・絵

平凡社名作文庫

——筆者紹介——

竹西寛子（たけにし　ひろこ）1929年生まれ。
作家，文芸評論家。おもな著書に小説「鶴」（芸術選奨受賞），「管絃祭」（女流文学賞受賞），随筆「月次抄」「道づれのない旅」「愛するという言葉」など多数。田村俊子賞，平林たい子賞も受賞。

長谷川青澄（はせがわ　せいちょう）1915年生まれ。
日本美術院特待。
」（奨励賞）など，作
絵本に「かぐや姫」

空に立つ波　　定価一、三〇〇円

一九八〇年二月二〇日　初版第一刷発行

著者　竹西寛子

発行者　下中邦彦

発行所　株式会社　平凡社

東京都千代田区四番町四の一　〒102

電話　東京（〇三）二六五-〇四五一（大代表）

振替　東京八-一九六三九

本文印刷　東洋印刷株式会社

表紙印刷　株式会社東京印書館

製本　和田製本工業株式会社

不良本はお取り替えいたしますので、直接小社サービス課までお送り下さい（送料は小社負担）。

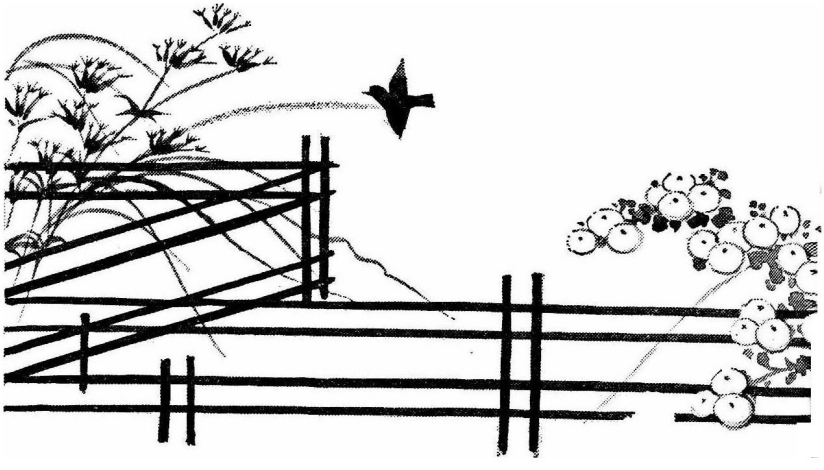
© 竹西寛子 1980　Printed in Japan

もくじ

はじめに……6
花の歌……17
鳥の歌……77
霞の歌……86
風の歌……91
七夕の歌……96
月の歌……102
鹿の歌……111
露の歌……118
紅葉の歌……125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雪の歌……132
賀の歌……142
別れの歌……146
恋の歌……149
哀傷の歌……215
五節の歌……218
姨捨の歌……224
紀貫之のこと……228
おわりに……239
歌の初句索引……244



表紙・扉絵　長谷川青澄
装丁　上野　球

空に立つ波

――「古今和歌集」――

はじめに

和歌は、古い時代の日本の代表的な詩でした。

今日では詩歌という呼び方があって、和歌や俳句を現代詩と区別していますが、日本だけでなく、世界の文学をごく大まかに詩と小説、評論、戯曲に分けて考えるようなとき、和歌や俳句は当然詩にふくまれます。

わたくしは、和歌や俳句の作者つまり歌人や俳人を、ときどきあえて詩人として見たり考えたりすることがあります。それは、和歌や俳句が特殊なものだ、特殊なものだという考え方に縛られたくないからで、ひろく詩の一種として読みますと、かえって親しくつき合えるようにも思われるからです。

和歌は、古い時代の日本の代表的な詩でした。平安時代になって仮名で日記や物語が書かれ

るようになるまで、日本の文学の歴史は、ほとんど神話伝説と和歌の歴史であったとも言えるほど、和歌は古代人の心を表現する主要な形式として愛され、重んじられました。

和歌とは、もともと漢詩に対して使われた倭歌のことだと言われています。「古今和歌集」は、一〇世紀のはじめに、醍醐天皇の勅命によって成立しました。当時の日本は、国の制度のお手本を中国に求めていました。男子の公式の学問は漢学であり、漢詩、漢文に通じていることが知識人の条件でした。

しかし、どんなに漢学や漢詩文が勢力をもっていても、これは日本人の言葉でつくられた学問でもないし、文学でもないのです。日本人が、自分たち固有の「やまと言葉」でうたった歌が、天皇の命令によって編まれるという古今集の成立には、ですから、日本の言葉、日本の文学の自己主張としても、大切な意味がふくまれていたのです。

紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑らのすぐれた歌人が、まず古今集の撰者に任命され、協力して、全二十巻、約千百首の歌を撰びました。

日本には、奈良時代から江戸時代にいたるまでの和歌の歴史の中で、文句なしに認められている三つの大きな歌の山があります。そのひとつがこの「古今和歌集」であり、その前にある

のが「万葉集」、古今集のあとにくるのが「新古今和歌集」です。

古今集も新古今集も、勅命によって成立した勅撰和歌集です。ことに古今集は、日本で最初の勅撰和歌集ですが、「万葉集」はちがいます。

「古今和歌集」の「古」は「万葉集」以後をさし、「今」は現代をさしていて、万葉以後に詠まれた歌、すなわち天皇十代、およそ一世紀半にわたって詠まれた歌の中から、約千百首の歌を撰び集めたのが「古今和歌集」なのです。

この歌集は、平安時代の初期における最も大きな、すぐれた歌集というだけでなく、同時代及び後の時代の日本の文学に影響をあたえた、その影響力の強さにおいても注目される歌集です。

鎌倉時代の「新古今和歌集」が、企てにおいても、歌集の構成においても、多く古今集にならい、題名通り新しい古今集を目指してそれなりの効果をあげているのはいうまでもありませんが、古今集と並んで平安時代の文学を代表する「源氏物語」でさえ、古今集がなければ成り立たなかったと言えるほど、古今集はこの物語の要に深い影響をあたえているのです。

平安時代の代表的な文学というばかりでなく、日本の代表的な古典でもある「古今和歌集」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と「源氏物語」が、そのような関係にあるのは、おろそかにできないことだと思います。「古今和歌集」は、詩の形式であらわされた日本人の感受性の見本として、また「源氏物語」は、物語の形式をとった日本人の感受性の見本として、今日まで根強く幅広い影響を及ぼしつづけています。

これらの作品の言葉は、ふつう古語と呼ばれていますが、かつてはみんな現代の言葉でした。時代社会の変化とともに、日本語にも変化が起こり、生きのびている古語もあればすでに死んでしまっている古語も少なくはありませんけれど、今日の日本語の大方は、そうした古語に支えられて咲いているのです。古語の歴史のないところに現代の日本語はありません。現代語は古語の血縁です。

「古今和歌集」は、詩の形式であらわされた日本人の感受性の見本だと申しましたが、同時にこの歌集は、歌の言葉のお手本集をも兼ねることになり、そのはたらきにおいても、古今集は後代の人びとに長く仰がれることになりました。

わたくしたちは、和歌をじっさいにつくらなくても、読まなくても、日常生活にさしたる不自由は感じない毎日を送るようになっています。しかし、古い歌を読んでいて、現代詩や小説

とはちがった勇気をあたえられることがあります。また、心づかいや言葉づかいについて、深く反省させられることがあります。そんなとき、わたくしはむかしの人に会った、と思うのです。顔かたちも背丈も分からないけれども、言葉づかいを通して、かつて確かに生きていた人と、ある感情を共有できた、と思うのです。

言葉にはそういうはたらきもあるのですね。わずかな数の言葉の中に作者の思いをこめる、その思いを圧縮する度合いは、日記、物語よりも和歌のほうが高いでしょう。作品を読むというのは、作品をなかだちにして、作者の歴史と読者の歴史をぶっつけ合うことだとも言えます。すれちがうか、火花が散るか、仲好く手を取るか、それは読んでみなければ分かりません。二度、三度読むうちに関係が変わってくることもあるでしょう。自分の目や耳が少しずつ変われば、作品の見え方も少しずつ変わってきます。

「古今和歌集」の歌人とわたくしの会い方も長い間にはずいぶん変わってきたような気がします。以前には見えなかったもの、聞こえなかったものが少しずつ見えたり聞こえたりしてくると、何となく心がはずみます。一〇世紀初頭の日本に、これほどのすぐれた歌人たちが働いたり、食べたり、眠ったりしていたということが、たいそう感動的なことに思われます。わたく

しはこの本で、古今集にみちびかれた感動をできるだけ素直に報告したいと思っています。歌の鑑賞に入る前に、ほんの少しだけ、「古今和歌集」の構成と配列について述べておきましょう。

わたくしたちは、毎年、松飾りやお雑煮で新しい年を祝い、年賀状を取り交わして、年の始めの挨拶をします。正月の三カ日が終わると、官庁はご用始め、松の内が過ぎると今度は学校が始まります。二月の節分には豆まきをして家の中から邪気を払い、三月の節句には、桃と雛飾りで女の児の健康と幸福を祈ります。このていどのことは、都会や農村を問わず、年中行事としてごくふつうに行っていることでしょう。

日本人が季節感の移りかわりを生活のリズムに取り入れてから、もうずいぶん長い年月が経ちました。あまり長く馴染んでいるので、当たり前のように感じていますけれども、このことにはやはり始まりがありました。

鶯は春の鳥、菊は秋の花。わざわざこんなふうに言うとかえっておかしくなるほど、わたくしたちは自然の風物を季節感で見たり聞いたりすることに馴れていますが、花や鳥、風や月を、一定の秩序で分類された自然の現象として見聞きするようになるまでには、まだ分類も整

理も必要でない、漠然とした、曖昧な状態のときがありました。

自然の運行に従って、生活に節目々々をつくること。これは日本より早く中国にみられた人間の知恵のあらわれで、さきほども申しましたように、国の制度のお手本を中国に求めた古い時代の日本人は、この中国の知恵にさまざまな影響を受けています。

日本は、地球上の位置からいっても、自然の運行を、小刻みな変化として見たり聞いたりすることのできる国土です。北極により近い国や、南極により近い国では、変化はもっと大まかになるようです。

中国の影響は影響として受けながら、自分たちの必要から、自然の運行の分類や整理を行ってそこに一定の秩序を見いだし、それを生活のリズムに取り入れた古い時代の日本人を、法令とか歴史書にではなく文学作品に求めるとき、何はさておきまずあげなければならないのが「古今和歌集」だと思うのです。

この歌集には、割合に長い仮名と真名の序文がついていて、本文の第一巻は春の歌で始まっています。全二十巻のうち、春・夏・秋・冬に分類された四季の歌は六巻を占め、恋の歌が五巻、その他の九巻を、賀の歌や離別の歌、羇旅の歌、物名の歌、哀傷の歌、雑の歌、雑躰の歌、

大歌所の御歌、神遊びの歌、東歌などで分けていますが、この構成からみても分かるように、古今集の主な内容は、四季の歌と恋の歌だと言うことができます。

「古今和歌集」に先立つ大歌集、奈良時代に成立した「万葉集」全二十巻の中にも、確かに四季の歌はありました。たとえば志貴皇子の、

石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも

は、れっきとした春の歌ですし、岡本天皇（舒明天皇かあるいは斉明天皇か）の、

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今よひは鳴かず寝ねにけらしも

は、これもれっきとした秋の歌です。

ただし、いずれも、大きくは雑歌、相聞（恋歌のこと）、挽歌（哀傷歌のこと）の三つに分類されている「万葉集」の、雑歌の一部であって、四季の雑歌の中の各一首なのです。春・夏・秋・冬の雑歌にも、同様に分類された四季の相聞にも、長い間人びとに親しまれてきた歌は少なくありません。

「万葉集」と「古今和歌集」の構成の大きなちがいのひとつは、四季の歌が、古今集においていかに重んじられ、しかも、いかに整然と配列されているかということです。たとえば、桜の

歌で言いますと、はじめて春を知った桜、つまり、はじめて花の咲いた桜の歌にはじまって、しだいに花盛りの歌へという配列の工夫があり、終わりのほうは散る花の歌で、居ながらにして花の盛衰に立ち会っているような仕組みになっています。

この仕組みは、恋の歌についても言えます。好きな人に逢いたい。逢いたいけれども思い通りすぐには逢えない。勝手に疑ってみたり、嘆いたり、そんな苦しい、悩ましい時期を経て、やっと恋は成就します。男も女も、愛を讃え、愛するよろこびにひたります。しかしどんな恋でも、よろこびのときは無限につづくものではありません。恋のうつろいとともに、男も女もまた新たな苦しみを味わいます。相手の心変わりを知って嘆き、自分の心変わりに責められる。歌もこうした順を追って配列されています。

大きな分類はありながら、その中での未整理がひとつの愛すべき特徴でもあった「万葉集」から、収録全歌数も万葉の四分の一そこそこの古今集にいたって、内容の分類に見ちがえるような形式美が示されたという事実には、「万葉集」から古今集にいたる時代の日本人の、感受性の変化をはっきり読み取ることができます。

かつては自然とともに自然の中で寝起きしていた古い時代の日本人が、自分たちの環境とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com